

『今月の天候と農作業』

通巻第5707号

1月号

令和7年12月25日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

2週目は気温がかなり低くなる可能性があります。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、強い寒気の影響を受ける時期があるため低く、特に2週目はかなり低くなる可能性があります。

低気圧や前線の影響を受けにくい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、低い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1週目の予報> 12月27日(土)～1月2日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<2週目の予報> 1月3(土)～1月9日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 1月10日(土)～1月23日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

I スクミリンゴガイ対策

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策では、作付前に貝の密度を低下させることが重要です。このため、発生が多いほ場では、厳寒期に必ず耕うんを実施しましょう。トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を早くすると、殺貝効果が高まります。

2 種子の選別と消毒

健全な苗を育成するために、塩水選や種子消毒を行いましょう。

種子消毒では、薬剤が種子を入れた袋の中心部まで十分に届くことが重要です。種子に気泡が付いていると効果が低下するため、袋をよく揺り気泡を抜きます。また、薬液の水温が、10℃以下とならないように温度管理に注意しましょう。

3 浸種と催芽

浸種の際の水量は、種子の2倍以上を目安とし、浸種日数は水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度とします。水温が10℃以下の低温での浸種は避けましょう。浸種後、30℃～32℃で24時間、芽が1mm程度出た状態まで催芽を行います。

◆ムギ類

I 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒性を高め、分けつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2、3回実施しましょう。降霜後など土壤や株の水分が多い時の作業を避けましょう。

分けつ期の肥料として、1月中旬に窒素成分で10a当たり2・5kg程度を施用し、条播きの場合は土入れを行います。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆きゅうり

摘心栽培では、草勢が低下すると不良果が発生するため早めに摘果を行います。また、採光と風通しを良くするため、生長点を2、3本確保しながら、黄化葉や発病葉、混み合った葉等を摘葉します。

つる下ろし栽培では、日照不足や低温等の影響により心止まりが発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減するとともに、定期的に葉面散布を実施しましょう。

◆ピーマン

促成栽培では、着果量が多いと草勢が低下します。かん水量を少し多くし、夜温を通常より高めで管理して、果実の肥大を早めるとともに、収穫間隔を短くし、葉面散布により草勢を維持しましょう。また、多湿な状態では病害が発生しやすくなるため、日中はこまめに換気し湿度を管理しましょう。

◆トマト

特に光を必要とする品目であるため、日中は内張カーテンを開け、光の確保に努めます。果実肥大や着色促進、食味向上のためには、玉出しを徹底しますが、過度の摘葉は草勢を低下させるため、避けます。

◆いちご

食味の低下や小玉化を防止するため、午前中は25～28℃を目安に温度管理を行い、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう裾玉を摘果します。

追肥は液肥を主体とし、窒素成分でひと月当たり2～3kg/10aを施用することを基本とし、生育を見ながら、かん水量と併せて調整します。

草勢の低下や乾燥した状態はうどんこ病の発生を助長するため、農薬の定期的な予防散布を行いましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

ハウス栽培やトンネル栽培では、播種や定植の作業が遅れないように、準備を早めに行いましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培の育苗時期です。苗の定植60日前を目安に種芋を伏せ込みます。種芋は水洗いをした後に、なり首と尾部を切除し、異常のないものを薬剤で消毒します。種芋を伏せ込んだら、保温資材で被覆して夜間の最低地温が20℃を下回らないよう保温に努めて萌芽を促します。萌芽後、日中は25℃を目安に換気し、葉やけや軟弱化を防ぎます。苗を定植する10日前を目安に換気を始めます。特に暖かい日中は積極的に換気をして、外気に慣らしましょう。

◆ばれいしょ

下旬から不織布による被覆栽培の定植期です。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗のため、植物防疫検査印のある種芋を用います。30g程度の芋が種芋に適しています。種芋が大きい場合は生長点から基部に向けて縦に割り、日陰で切り口を乾かして使用しましょう。

◆ごぼう

9、10月播種分の収穫期です。収穫開始時期は、根部の肥大状況を確認しながら、適期収穫を行いましょう。

◆スイートコーン

ハウスやミニハウスでは1月中旬から、大型トンネルでは下旬から播種適期になります。地温が低いと発芽不良となるため、播種の1週間前までにはトンネル被覆を行いましょう。

(倉永 泰代)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆完熟きんかん

1月中旬から完熟きんかんの出荷が始まります。収穫開始は、着色状況や糖度を基に判断します。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐため、昼温は15°Cを目安に管理します。

また、裂皮を防止するため、早朝の換気等により施設内の湿度を低く維持します。果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいため、丁寧に扱いましょう。

◆マンゴー

開花期に湿度が高いと、花穂に軸腐病や灰色かび病が発生し、その後の果実品質が低下します。早朝の換気・除湿や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。また病害対策として、微生物農薬を加温用ダクト内に投入し、送風する方法があります。普及センターやJAに相談してください。

幼果期以降も早朝のハウス内湿度を低く保つことはあざ果の発生抑制にもつながります。今後、厳寒期を迎えるとハウスの密閉時間が長くなるため、ハウス内の湿度や果実の結露等を確認し、朝夕のハウス開閉等をこまめに実施するなど、除湿対策に留意しましょう。

これから出蓄を迎える園では花芽の状況を確認しながら、焦らずじっくりと温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

2 果樹全般

◆寒害の事前対策

園地に冷気が停滞するのを防ぐため、防風林のすそ枝は地上1mくらいまで剪除します。密集した防風林では、防風樹の間伐を実施します。

土壤の乾燥が激しい場合に寒害を受けやすくなります。日中の温度が高い時間帯に定期的にかん水を行います。また、苗木は耐寒性が弱いため、枝を束ねて全体をわらで覆うなど、防寒対策を実施しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

1～2月に消灯する作型では、花芽分化時の温度が最も低くなります。夜温を十分に確保するため、加温機の設定温度を確認しましょう。栄養成長期間中に低温に遭遇した場合は、開花遅延防止のため消灯1、2週間前から夜温15℃で予備加温を行います。

また、消灯後の夜温は変温管理を行うなど、暖房コストの削減に努めましょう。

◆スイートピー

12月下旬から日射量が増加するため、植物体の蒸散も徐々に活発になります。かん水が遅れると2月以降の草勢低下につながるため、天候と草勢を見ながら、かん水頻度を徐々に増やし、草勢維持のために適宜追肥を行いましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長します。ハウス内の採光をしっかりと確保し、カルシウム剤を適宜施用することで、茎の硬化とボリューム確保につながります。

◆ラナンキュラス

日中は、採光のため内ビニルの開閉をしっかりと行います。なお、日中のハウス内温度が低すぎると、光合成速度の低下により萌芽や芽の伸長が遅くなり収量に影響するため、15℃を目標に管理しましょう。

また、収穫が続くと草勢が低下しやすくなるため、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図りましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

令和7年12月24日現在、全国8道府県において、宮崎県の1例を含む9例の鳥インフルエンザが発生しています。県内に飛来する野鳥からもウイルスが確認されており、依然として養鶏場への侵入リスクが高い状況が続いています。

豚においては、豚熱(CSF)に感染した野生イノシシが多数確認されており、養豚場へのウイルス侵入リスクが高い状況も続いています。

これらの法定伝染病から農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。また、日頃から健康観察をしっかり行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜

今月は年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に、寒さ対策として畜舎を閉め切るため、舎内が換気不足になりやすい時期でもあります。換気不足は呼吸器病発生の原因となるため、気温が上がる日中には畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど、換気を十分に行いましょう。また、乾燥する時期は埃や塵が多く、呼吸器病の原因となりやすいため、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。幼畜の寝床は常にきれいな状態を保ち、床面が露出しないようにおがくず等を厚めに敷くなど腹冷え対策を実施するとともに、保温箱やコンパネ等による風よけの設置、コルツヒーターや赤外線ヒーターなどの効果の高い保温器具を使用し、保温に努めましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の発生が懸念されます。被害を受け易い茶園では、防風ネットの設置や土寄せ等による対策を行いましょう。

また、山間地で積雪による枝折れや裂傷が発生した際は、被害程度が明らかになる融雪を待って、事後対策を行いましょう。

2 定植ほ場の植付け準備

今月は定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植して摘採するまで4、5年を要し、一度植付けると植替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の微気象や茶樹の特性を把握した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壤は排水性が良く、作土層が深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は、事前の対策として、深耕による混層や明渠・暗渠等の排水対策を行いましょう。

また、アルカリ性土壌や改植茶園では土壌pHの調整と堆肥施用による地力増強を図りましょう。さらに、土壤線虫被害が懸念されるほ場では、早めの土壤消毒を行いましょう。

(新 正仙)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌作業は、玉切りした原木が乾きすぎないうちに、できるだけ早めに行います。

植菌後の原木は、菌糸の活着と伸長を促進するため「仮伏せ」を行います。原木は地際から60cm以下の高さに横積みして、ほだ木の上面と周囲を笠木や遮光ネットなどで被覆し、保温と保湿を図ります。また、日当たりと排水の良い場所を選定し、風通しが悪くならないよう注意が必要です。

2 寒子づくり

寒子は冬の寒い時期に発生、収穫したものを言い、肉厚のしいたけ生産が可能です。防風垣の設置などほだ場の湿度の保持、袋かけやビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、品種毎の発生温度等を考慮し適正な時期に散水等の発生操作を実施し、ほだ木に必要な水分を与え、発生を促します。

3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄（冬菇・香菇・香信）で収穫するよう適期に採取するほか、日和子での収穫に努めます。

(奥野 慧)

関連情報

◆農作業安全

農作業死亡事故の多くは機械作業時に発生しています。

機械作業時のオペレーターの不注意や作業ミスに加えて、機械の故障や整備不良が農作業事故発生の原因となる場合があります。また、機械の故障により、適期での作業が出来なくなると収量や品質低下を招くことにもなります。

このため、農閑期中には、機械・施設の点検やメンテナンスをこまめに行うことでの事故防止に努めましょう。

◆気象災害対策

宮崎農業気象WEB SERVICE（ウェブサービス）では、様々な気象災害に対する対応策をわかりやすく掲載しています。農作業の参考にしてください。

<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp/>

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかり確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆堆肥による化学肥料削減

堆肥には、土壤改良材としての効果の他、肥料としての効果があります。

県が作成した堆肥利用に役立つサイトやツールを活用し、堆肥を上手に使って化学肥料の使用量低減、生産コスト削減に努めるとともに、環境に配慮した持続可能な農業に取り組みましょう。

★みやざきの堆肥検索サイト

生産地や畜種、荷姿等から条件を絞って、県内の堆肥を検索できるサイトです。現在70事業者が登録しています。

★堆肥施用量計算カルテ

化学肥料の代わりに堆肥を施用する量を計算できるサイトです。使う堆肥の種類を選択し、作物の施肥基準値を入力すれば自動計算されます。

<https://hinatamafin.pref.miyazaki.lg.jp/soshiki/nogyohukyugijutuka/1727.htm>

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	一	施設内が多湿になると、病害の発生が多くなるため、適宜換気等を行い施設内の適切な温湿度管理に努めましょう。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病	並 並 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病害は高温、多湿条件下で発生しやすいため、適正な温度・水管理に努めましょう。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発病を確認したら初期防除を徹底しましょう。
	黄化えそ病(MYSV) けきイロアザミウマ	並 やや多	キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分しましょう。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう。
	タバコナジラミ	やや多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、施設内で増殖しないよう早期発見、早期防除に努めましょう。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	一	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行いましょう。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病 菌核病	並 やや多 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底しましょう。初期の発病葉はほ場外に持ち出し、伝染源にならないよう適切に処分しましょう。また、殺菌剤の付着率向上を目的に、生育に影響の無い下葉はできるだけ除去しましょう。
	けきイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバコナジラミ	やや多 並 並	ミナミキイロアザミウマの発生が多くなっています。 いずれの害虫も有色粘着板を設置し、早期発見、早期防除に努めましょう。 ヒラズハナアザミウマは、花数が減少する時期が防除適期となるため、この時期を逃さずに、花にしっかりと薬液が付着するよう防除しましょう。
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 すすかび病	並 並 やや多	すすかび病の発生が多くなっています。 いずれの病害も多湿条件で発生しやすいため過繁茂にならないように管理を行うとともに、ハウスの換気を行いましょう。 また、病勢が進展してからでは防除効果が低くなるため、発病を確認したら早めに防除しましょう。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバコナジラミ	多 多	TYLCV 及び媒介虫であるタバココナジラミ発生が多くなっています。タバココナジラミの早期発見に努め、低密度のうちに防除しましょう。TYLCV の発病株を発見した場合は、必ず株全体を抜きビニール袋に入れて枯れるまで密閉するなどして、適切に処分しましょう。
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや多 並	うどんこ病の発生が多くなっています。 いずれの病害も、予防に重点をおくとともに、罹病した葉と果実は伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外に持ち出し処分しましょう。
	ハダニ類 ヒラズハナアザミウマ アブラムシ類	やや少 並 やや少	ハダニ類は寄生密度が高くなつてからの防除は難しくなるため、低密度時に防除を徹底しましょう。 ヒラズハナアザミウマは、花や果実に寄生し、食害により果実品質が低下するため、低密度での防除に努めましょう。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。

